



戸川 謙一さん(川添)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：7月21日

この川俣町と、ふるさと浪江町の懸け橋になりたい



避難生活を送ってきた川俣町山木屋地区の人たちと自治体や国とをつなぐ仕事に取り組む戸川さんは、「避難指示解除後のこれからが“正念場”。川俣も浪江も一緒ですよ。山木屋900人ではなく、一人一人、(1/900ではなく)1/1人の暮らしへの要望や不安などの声を拾い、丹念に伝えることが私の役目だと思っています。」とおっしゃっていました。

平成28年11月に、復興公営住宅壁沢団地に転居し、平成30年4月からは復興庁の市町村応援職員として、以前と同じ部署

◆川俣町に避難。以後、暮らしも仕事もそのご縁です
震災当日は、東京電力第一原子力発電所の事務本館に滞在していました。最初はプラント事故かと思いましたが1号機は何事もなく、退社したものの道路は大渋滞。徒歩で帰りました。自宅はさほど被害も無く、家族も無事でしたが、翌朝は避難を呼び掛けるサイレンで起こされました。津島に向かったものの、すでにこの避難所も満杯で、川俣町立川俣南小学校に約10日間。その後、おじまふるさと交流館に夏までいました。当時一緒だった浪江町10世帯と南相馬市4世帯など主な世帯は、川俣町が管理する中山工業団地応急仮設住宅に入居することにしました。
避難した当初、通勤がままならないこともあり職場を退職しましたが、川俣町原子力災害対策室(現在は原子力災害対策課)で絆づくり支援員となり、放射線や放射能測定業務に就きました。仮設住宅では自治会長も務めました。川俣町の職員さんが常に近くにいたので、住民の要望や提案などは伝えやすかったですね。

◆いつか浪江に。子供たちの成長と仕事は今が優先ですね
うちには子供が3人おります

◆浪江出身と伝えることで、心の垣根を超えています
川俣町の一部避難地区となった山木屋の方々に訪問し、暮らしの様子や放射線への不安、帰還に関する相談などを行っています。山木屋と浪江は隣同士ですから、昔から往来があつて縁が深いんです。ですから、訪ねて自己紹介をする時、真っ先に浪江町出身と伝えると一気に打ち解けたり、逆に励まされたり、お氣遣いいただくこともあります。
平成29年7月1日、国道114号沿いに復興拠点商業施設「とんやの郷」がオープンしました。山木屋の人たちはもちろんですが、浪江町を始め、中通りと浜通りを行き交う人たちにもどんどん活用していただきたいんです。私にとっても、ここは浪江とつながる重要拠点であり、希望の場です。
町では、この施設が地区のにぎわいを復活させ、帰還を促す足掛かりの場として大きな期待を寄せています。お蔭さまで、利用者は予想より早く5万人を超えました。まだまだご存じない方も多いようです。利用者数の増加を図るにはイベントや折々のPRなど周知活動が鍵になるかと思っています。



▲利用促進の仕掛けの一つである「食品検査」販売目的以外の食品の持込みは約10分で測れます。平成30年2月から、どなたでも利用できるようになりました。
受付：情報発信コーナー(平日10時~16時30分) ※最終持込みは16時10分まで

▲山木屋地区復興拠点商業施設「とんやの郷」浪江にお越しの際は、休憩、お買物やお食事に、ぜひご利用ください。
トイレは24時間利用できます。お買物は10時から18時まで、お食事処(定休日:日曜日)は11時から14時までです。

が、一番上は就職し、2番目と3番目は来春、大学と高校進学です。私の仕事もありますから、当分は川俣町にお世話になります。
妻と2人になり、浪江町にこれまで経験を生かせるような仕事があるようでしたら、いつかは言えませんが、戻ることができたらいいですね。



浪江のころ通信

第88号

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。
一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のころ通信は、町民の皆さんがお話した「ころ」を伝えることを大切にすため、取材者が聞き取ったまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。
※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のころ通信/第88号」への感想をお寄せください。
【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





今野 満里実さん(南津島)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：8月11日

ふるさと・津島の伝統芸能を継承し、次の世代につなげたい



▲平日は役場の仕事でお忙しい今野さん。白河駅にて。

津島で生まれ育った今野さんは、二本松市の高校を卒業後、短期大学と専門学校を卒業し、西白河郡中島村役場に就職しました。現在は仕事に邁進しつつ、ふるさとの伝統芸能を継承しようとして「津島の田植踊」の早乙女役の振り付けを習得。今年1月には二本松市で開催された発表会で早乙女役を踊り、好評を博しました。

◆役場勤めの苦労や楽しさ
今年の4月から中島村役場に勤めさせてもらっています。建設課で上下水道関連と公営住宅の担当をしています。まだまだ分からないことだらけで、一つ一つ先輩方に教えてもらっています。事務的な仕事をしながら現場のことを学ばせていただいているので、大変なこともありませんが、村民の方に「ありがとうございます」と言ってもらえると本当にうれしくて、もっと頑張ろうと思っています。

◆ふるさと再生への思い
震災が起きた年は、私は憧れていた南相馬市の高校に進学し、4月からの高校生活を楽しくみに行っていました。けれど震災が起き、福島市、それから岩手県の親戚宅に避難した後、5月から二本松市内の高校に転校したんです。転校してからは周りの人に支えてもらい、大好きな友人もできたので、今ではこういう道も良かったんだなと思っています。けれど避難後はすごく無気力になってしまったことがありました。ただ、ある日津島の中学校を訪ねたら「卒業おめでとう」というお祝いの掲示がそのまま残っていて、それを見た時、自分も地域のために何かできないかなと強く思いました。

◆心をつなぐ津島の伝統芸能
両親は大玉村に住み、私は中島村で一人暮らしをしています。津島の方とはいろいろな形につながっています。避難した当初は、津島出身の児童と保護者でキャンプに出掛ける機会もありました。それから地域の伝統芸能「津島の田植踊」を保存・継承していこうという取組がありまして。今年1月14日には二本松市で発表会が催され、私もお声掛けいただいたので、早乙女役を踊らせていただきました。

津島は山林が多い地域です。森林について学んだら何か役に立てるかもしれないと思い、神奈川県立短期大学に進学しました。私のリサーチ不足で、想像していたようなカリキュラムではなかったんですが、短期大学の先生に、公務員という道もあるよとアドバイスをいただいたのがきっかけで専門学校に入りなおし、今の仕事に就きました。短期大学で学んだことも職場で役立っていますし、2年間の学生生活は私には必要な時間だったんだと思います。



山田 琴子さん(大堀)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：8月2日

浪江への思いを胸に、日々の暮らしを楽しみたい



▲周囲の人を和ませてくれる琴子さんの笑顔…息子さんのお仏壇の前で

京成津田沼駅から徒歩5分のマンションに、お嫁さんの邦子さんと二人暮らしの琴子さん。近くに住むお孫さんたちや友達との行き来もあり、精一杯今の暮らしを楽しもうとしていらっしゃいます。

◆津田沼(千葉県習志野市)での暮らし
津田沼で暮らして6年、お蔭さまで大した病気もせず、ご近所さんや浪江町の仲間との行き来を楽しむことができています。今日も、住んでいるマンションの同じ階に住む人が、福島の昔話の読み聞かせをするから、方言を教えてほしいと頼まれ、「あんば様」や「歯形の栗」の話をしました。方言で話しては分からないだろうと思いき、普段は使わないようにしているけれど、病院の行き返りに乗るタクシーの運転手にも「東北の人ですか？」と聞かれることもあるから、「浪江言葉」が出ています。津田沼の支援団体が主催する交流会「にんじんカフェ」やバスツアーに参加して、同じように浪江町から避難して暮らす人たちとおしゃべりするのを楽しみます。今年の夏は、今までに

リフォームし、越して1年経った頃、息子は亡くなってしまいました。息子は、浪江町で「山水社」という配管工事の会社を経営していました。使用人が10人ほどいて、孫も中心となって働いていました。震災の時は、会社を設立して10年、順調に事業を拡大していた時でした。

大堀は避難指示がまだ解除されていません。福島第二原発の復旧も先が見えていない中、浪江に帰ることはできないと諦めています。悔しい思いは胸に止め、これからも、日々の暮らしを楽しみたいと思います。



▲浪江から避難してくる時に持ち出した「修了証」…頑張ってきた証し

◆息子が亡くなる
震災直後、私は息子夫婦や孫夫婦と一緒に2台の車に分乗し、いくつかの避難所を経て、埼玉の娘の所に避難しました。娘の家に着いたのは、震災後1週間を過ぎていました。着の身着のままだったのでも、通り掛かりのスーパーで着られるものを買って行きまし。10日間近くもお風呂に入らないでいたという経験は、これまでなかったですね。娘の家にも、大勢で長く居るわけにもいかず、津田沼の借上げ住宅に越してきました。その後、孫夫婦が津田沼の近くの藤崎のマンションに引っ越したので、行き来がしやすい場所が良かろうと息子が、このマンションを探し当てました。

◆浪江に帰りたい
震災前に、隠居所をリフォームして、台所やトイレ、お風呂も付けました。9時頃になると近所の友達がお茶飲みに来たよ！と訪ねてくるので、朝4時には起きて畑仕事を済ませ、みんなが来るのを待つのが日課でした。今、住んでいるマンションは駅にも近く、不便はありませんが、浪江での生活と比べると、何だか檻の中にいるような気がするときもあります。浪江に帰れるようであれば帰りたい、そんな思いでいた2年ほど前、井戸川さんが自分の車で、大堀の自宅付近まで連れて行ってくれました。家の様子も気になりましたが、母屋の西側にある「氏神様」がどうなっているか見なかったのです。でも、家の周辺は高い草木に覆われ、近づくとくもく臭いでした。